

のしよさまぐあれども、こゝに其ひとつふたつをあらはすべし。」挿絵三回]

申、陽春 関文書堂上梓 了

高貴御用

女性常の心得 華手小路春長

一、女性は心順にして禮儀正しく恥あるを以て淑徳と致し候。淑徳なれば公家大名の姫君にても下素に異る事なく、下賤の配女にても淑徳備はり候へば公家高家の隙中の奥方とも仰がり申すべく候。さすれば下世話に女は代なくして玉の輿に乗ると申候も偶に賤女より天然の淑徳備はれる女性顯はれて御書所と相成候事もありとの事に候。御輿入の後は必ず順を以て御心と遊ばれる事に就ても殿御に口を返し又は荒々しく言ひ拳動を爲し、或は猥がましき行ひ等事慎しめ遊されまじく候。

一、奥方は氣田高きまよしと致候。さりながら氣田高ければ情薄くなり、情濃かなれば品格を失ひ中庸を得ん事誠に六ヶ敷候。故に禮儀を正しくすれば品格乱れず、心さ順にすれば情薄らからず情濃かたして品位高き奥方たらん人には順と禮とに依るを第一と致候。

一、殿御の御運勢は奥方の愛とし恋しい由るものに候故に奥方常に優に美はしく花の如くなれば殿御の御運勢は春の如く、日に日に萌ゆるまで御立身遊ばめ々候、之に反して奥方若し憂ひ怒り悲しみ怒み等其こゝろに有しては御顔にあらはれ、又は言葉の端行ひの上にあらはるゝ時は殿御の御心は其度毎に乱れて果ては御運法り衰極き御身も遂に「しづ」給ふに至るゞし、天故に古来より大望ある武士は妻を持つも妻を持つがとまで申候、妻なれば何時にても去るゞくも、正妻は去り難きが爲めに候、尊慎しみて殿御一代の御守りばさつと御成りはさるゞく候。

閨の御慎の事

一、御色気薄きは情なく御夫婦の御中睦まじからず終には御家の滅亡とも相成り申すべく候。又色気は充分なるを可と致し候、されど色は乱れやすきものにて之より礼を失ひ候、端なき拳動顯はれて殿御に見付けらぬ愛想を盡さる事最も多く候、故に国の中にては殊に淑徳を尊びて順を以て愛を補ふことに候、殿御より如何に迫り給ふとも自ら進んで情を商ひ歌妓に等しき猥らなる拳動必ず遊されまじく候。

一、女の良人に嫁して初めに愛せられ後に愛想を盡さるゝは皆閨中にて淑徳を失ひての争に候。況して国殿の奥方としては妾に等しき行ひありて其身の品格を失ふは第一の恥に候。

一、用事終れば必ず寝床を別にし給ふべし。寝床一つなれば末にはきつと愛想をつかさるゝものに候。

一、閨に入る時は幾日の後までも初めての如く恥かしき面色なれば妾の如くなりて品格を失ひ候。用事すみて後必ず殿御の心に嫌気起りて度重なるに従ひて種々に成され、机辺にわらひ絵を置き之を眺め、又は陰所に手をいれて扱ぐりなどし給ふ事あり。斯様の時心掛なき女性は輿に乗じてあられもなき大口をきゝ、或は自ら心崩れていきあらくならして恥もなく拳動ふ方様もありと申す事にて候。

一、総て殿御の用事にかゝり給ふときは種々にして曲をつくし充分に仕度く思ひ給ふが常なれども用事終れば見るも嫌になるとか申す事にて、心に下卑れ申候。色は柔しくして恥かしき内に味あるものにて恥かしき面色ある程情深くなり申候。故に殿御の閨に入り給